



# 「バーニン・アン・ルーティン」：男が泣く、ジャマイカ社会の一断章

長嶋, 佳子  
柴田, 佳子

---

**(Citation)**

大阪学院大学国際学論集, 8(1):1-33

**(Issue Date)**

1997-06

**(Resource Type)**

departmental bulletin paper

**(Version)**

Version of Record

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90001862>



「バーニン・アン・ルーティン」  
——男が泣く、ジャマイカ社会の一断章——

柴 田 佳 子

“Burnin’ an’ Lootin’ ” :

When Men Cry in Contemporary Jamaican Society

SHIBATA YOSHIKO

*ABSTRACT*

Reggae has famously depicted the various emotions and commotions in the lives of millions of common people, mostly living at the bottom of society and largely voiceless. In this short article, I shall try to probe into some aspects of the song “Burnin’ an’ Lootin’” which pictures personal and social sorrows, anger and frustration primarily due to socio-economic pressures and the cruel aspects of the “system”, symbolically epitomized in the expression “in uniforms of brutality.”

The tone of the song is like an autobiography, epic, or even a book of prophecies, and is well coordinated with the melodic line and off-beat of the reggae rhythm. The lyrics are aesthetically stimulating. Together, each word and rhyme conjure a multitude of powerful meanings.

Simply put, the song tells how the common people of Jamaican society have suffered oppression — “wrongly accused” and abused — for too long. Understanding their social background will lead us to appreciate this kind of song more deeply.

Such a long history of oppression and frustrated hopes led to

the development of very particular attitudes and strategies for survivals. These patterns of behaviour and expression resonate with the memory of the days of slavery, and the fact that they persist so strongly, although slavery ended over 150 years ago, indicates how little times seem to have changed according to common experience.

Jamaicans in general have been known for their 'aggressiveness' and not lying down in the face of injustice and oppression. The number of slave revolts was almost the highest in the whole Caribbean. After Emancipation, explosive "rebellions"/riots such as the Morant Bay Rebellion came to mark historical turning points in the socio-political current. Labour disputes and protests such as local go-slows, and nation-wide strikes have been numerous. Labour union movements became the base for the two major parties JLP and PNP. More religio-political mass movements (e.g., Garveyism, Bedwardism) emerged intermittently to emphasize the spiritual and cosmic dimensions of the problem. Latterly the development of the Rastafarian movement, black consciousness and sundry student movements has led to a lot of social disturbance, as — depending on one's point of view — they have been interpreted as simply anti-social or brave champions of reform.

So much radical activity has clearly shaken and re-shaped the socio-political system and cultural values considerably. Yet the basic sense of oppression, and the motifs by which this is expressed, remain largely unchanged. This can be seen in the way the contemporary political atmosphere causes so much anguish. The bi-party system is seen to be a mere power game, and "political violence" is notorious, especially during election campaigns.

The song cleverly and sarcastically criticizes people in uniforms, such as policemen. The mutual relationship between violence and what may be symbolized in 'uniforms' highlights the 'brutal' nature of the "(Babylon) system", and how it has come to stand for a repulsive combination of corruption, decay and repression. Like a 'vampire' it de-composes and recasts people

to serve its evil purposes. This is the horror and misery of the ordinary, nameless citizens, in thrall to such a system. The Police, as an epitome of the power of the “system”, has been notorious for protecting criminal gangs that smuggle and sell “ganja” (marihuana) in return for information on local activity, a problem well depicted in the film *The Harder They Come*. They have targeted religious groups, Rastafarians in particular, and seriously infringed upon personal freedom of faith. This unfairness and unnecessary brutality towards radical but not criminal activity is discussed with regard to the case — variously described in the press as ‘weird’ or ‘horrifying’ — of “Rev.” Henry and his son.

In the song, reggae musicians, as individual victims of the misuse of power and authority of the “system” and as spokesmen of a whole enraged and oppressed people, ‘wailed’ to ‘burn an’ loot’ in order to purge the “pollution” and “illusion” that has permeated society.

## I. はじめに

涙、笑い、喜び、怒り、叫び、嘆き、かなしみ、訴え、祈り……そして魂の鎮静と高揚……誰でもが経験し、その生きる歩みを確かに、深く、しかも激しくしようとすれば必ず通過する悲喜こもごもの人生模様と心模様を、レゲエは描いてきた。それらは時に激しくぶつけられ、ある時はしんみりつつぶやかれる。現実には鋭く容赦無く描写され、また人々の心のひだのあやは巧みにあぶり出される。コミュニティや社会のミクロな歴史は内側からの視点で暴かれ、無名だがそこでたくましく生き抜いてきた大衆の自己の存在証明がアピールされてきた。それゆえ、レゲエは多数の共感／共観を得て、さらに歌い継がれている。

涙は諸々の現実の生活場面で経験される。実生活のリアリティに満ちたレゲエがそれを公けにしてくれたと感じるとき、人はその共感度をこの上なく高めていく。聴衆が1人で、またレゲエのライブ演奏の只中で大勢の中に混じって、自ら口ずさみながら、抑え難い熱いものをこらえられずにいるという場面を筆者は目にしたことがある。本誌第6巻第2号では、レゲエのヒット曲で表現される女性の涙の背景を扱った。その時、泣くのは女性だけではないことを述べておいたが、本小論では男性が涙する場面を取り上げたい。たとえ歌詞に直接的表現がなくても読み取れることはあるが、ここでは明確に歌詞から浮き彫りにされるような男性の涙、嘆き、かなしみの一面を扱う。それには、社会的背景をより良く知らなくてはならない。

### 「バーニン・アン・ルーティン」：歌のトーンと形式

ここで取り上げる歌は、ボブ・マーリー作詞の「バーニン・アン・ルーティン」(Burnin' an' Lootin')である<sup>1)</sup>。

1) 標準英語を極力用いた歌詞を最後に付しておく。『バーニン』(Burnin') (c. 1973) というアルバム所収のものが最も有名である。ジャマイカ生まれの富裕な白人クリオール、クリス・ブラックウェル (Chris Blackwell) のアイランド・レコード社 (ロンドンが拠点) より、ザ・ウェイラーズ (the Wailers) として発表したアルバムの第2作目。ザ・ウェイラーズがバニー・ウェイラー、ピーター・トッシュという大

「焼き討ちと掠奪」というタイトルから予測できるように、不気味な色合いの濃い曲である。実際、メロディはマイナー調で、哀れを誘う。唸るような音の動きは警告を発し、予言するようなトーンが強い。それは鋭く叩き出されるオフ・ビートのリズムによって、さらにたたみかけられるように響く。歌詞は自伝的であり、エピックのようでもあり、また預言書の語りのようでもある。

歌詞は一応、正統的な4行詩のスタイルをとっている。適度な押韻や的確な反復とそのヴァリエーションといった技術的な側面も配慮されている。単語や文節も巧みに選択され、言葉の流れは曲にマッチし、審美的にも刺激的で心地よさを感じられる。

脚韻については、第1スタンザの3、4行目<sup>2)</sup>、第2スタンザの1、2行目<sup>3)</sup>、3、4行目<sup>4)</sup>、やや変則的だが第3スタンザの繰り返し部分<sup>5)</sup>、そして第4スタンザの1、2行目<sup>6)</sup>、3、4行目<sup>7)</sup>にみられる。また第3スタンザにも少しみられるが、第5スタンザにはアフリカの民俗音楽で多用されるコール・アンド・レスポンス (call-and-response) 形式と解釈できる部分があり<sup>8)</sup>、その中のレスポンス部分がやはり押韻の効果<sup>9)</sup>をあげている。そして、これら押韻された単語はすべて、重要で深い意味をもつものである。

レゲエ全般にはほぼ共通することだが、使用言語は標準英語に近いものの、ジャマイカ的な (パトア patois と現地では一般に称される) クリオール (creole)<sup>10)</sup> 表現が前面に出ており、妙味を醸し出している。たとえば動詞

---

物ミュージシャン (最初のトリオ) を含んだオリジナル・メンバーでのものとしては最後のアルバム。

- 2) “me” と “brutality”
- 3) “cross” と “boss”
- 4) “lost” と “cost”
- 5) “pollution” と “illusions(s)”
- 6) “grow” と “blow”
- 7) “slow” と “ghetto”
- 8) ( ) 部分がレスポンス部分
- 9) “tears” と “years”
- 10) 「クレオール」と日本では紹介されるのがほとんどだが、現地での発音は「クリオール」に近いので、ここではそれを用いた。

の前に“a”をつける<sup>11)</sup>のもクリオール的だが、その応用はキャッチ・フレーズの“burnin’ and a-lootin’”にもみられる<sup>12)</sup>。

では、描かれている内容から何が見えてくるのだろうか、それを筆者なりに読み取ってみよう。前述のアルバムのコピーライトが1973年であることから、この曲を扱うことは、必然的に1960年代後半から1970年代初頭のジャマイカ社会を主に凝視することになるであろう。しかし忘れてはならないのは、この曲がいまだに熱狂的に受け入れられ、唱和されていること、描写の内容も過去に限定されているわけではなく、近年にもまた現在でも妥当する部分を含んでいる、ということである。

## II. 社会的欲求不満の蓄積

第1スタンザのまず導入部から、戒厳令が施かれ、外出禁止令が告げられた首都キングストンの物騒な日々の様子がクローズアップされる。戒厳令や外出禁止令が発動されるのは非常事態だからであるが、それはジャマイカの政治、経済状態の悪化により誘発されたと多くの人が解釈する社会全般の不穏化に起因している。様々な欲求不満は事実、大小の暴行を生んできた。忍耐の限界を乗り越えてすでに抑制不可能となった憤怒が、焼き討ちや掠奪に向かっていったことは、事実あった。相対的な貧富の差の大きさ、理不尽な社会環境や個人的な不遇にさいなまれてきた人々は数知れず、犯罪率もかなり高い<sup>13)</sup>。現在に至るまでジャマイカには「危険な国」と

11) 動詞の原形が使われる時が多いが、(たとえば Mi a go school. ≡ I am going to [go to] school.) 動詞に -ing を付した形も同様に多い。

12) ジャマイカの言語については、たとえば古典的な Frederic G. Cassidy, *Jamaica Talk: Three Hundred Years of the English Language in Jamaica*, Second ed. 1971 c. 1961, Basingstoke & London: Macmillan Educations Ltd. や Manfred Görlach & John A. Holm eds. *Forums on the Caribbean* (Varieties of English Around the World G. 8), 1986, Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins Publishing Co. の中のジャマイカを扱った5本の論文などを参照。

13) 1989—90年の犯罪件数は4.4万件(89年)、4.6万件(90年)である。人口は1990年推計で241.5万人だが、凶悪暴力犯罪の内訳は殺人490件(89年)、580件(90年)、強姦1,100件(89年)、1,000件(90年)、強盗4,500件(89年)、5,360、7,214件である。しかも、「これら凶悪犯罪に対する平均検挙率はいずれも5割前後。」外務省「ジャ

いうイメージがついてまわるほどである。

そのような悲惨の元凶は、長きにわたった奴隷制や植民地主義<sup>14)</sup>、プランテーション制度や新植民地主義的状況等の外部要因にあると住民は即座に糾弾する。しかし、現在に至るまでがんじがらめになり、抜き差しならない貧富の差、人種・民族的カテゴリーや容貌（特に皮膚の色）と社会階級の相関関係、構造的な従属と低開発などのよく知られた問題を幾重にももたらしたのは、内部要因によるところも大きく、外にスケープゴートを見つけるだけでは正しい現状認識と問題解決には至らない。要人のみでなく一般の住民も、現状への否を執拗に突きつけ、また体制の悪弊に迎合しないだけの粘り強い気力と表現力をもたねば、悪循環の鎖は断ち切れない。

しかし大多数は、いくつもの容易に解決されえない多種多様の複雑な困難に直面しつつ生活しており、その重圧には時に我々の想像を超えるものがある。階級や人種・民族的背景の差異などにかかわらず、いつ爆発してもおかしくないような欲求不満が常々抱えられてきた、といっても過言ではないのである。

1962年に政治的独立を遂げたからといって、ジャマイカですべてのことが新しくなり、経済的にも自立したわけでは決してない。それどころか、新植民地主義の諸現象（「症状」）は社会のあちこちできしみ音をたててきた<sup>15)</sup>。ジャマイカを含めたカリブ海地域出身者たちからのポスト・コロニアリズム的諸言説が昨今特に注目されているが<sup>16)</sup>、多層なレベルで問題は山積してきたし、その解決は容易ではない。

## 1. 民衆の抵抗

マイカ」概況1996年発行。

- 14) 1655年にスペインから英国の手に支配権が移った時より1834年に英国が奴隷制を廃止するまで、170年近くになる。また独立まで307年間、英国の植民地だった。
- 15) 独立期の諸問題を論じた文献は少なくないが、Rex Nettleford, ed., *Jamaica in Independence: Essays on Early Years*, 1989, Kingston: Heinemann Caribbean / London: James Currey; R. Nettleford, *Mirror Mirror: Identity, Race and Protest in Jamaica*, 1970. Jamaica: William Collins & Sangster Ltd. などが好著。
- 16) カルチュラル・スタディーズ (Cultural Studies) グループの代表とさえ言われるジャマイカ人スチュアート・ホール (Stuart Hall) は特に有名である。

庶民の欲求不満がどの程度であったかについての一つの明瞭な目安は、労働者のストライキの多さにもあらわれている。(【表1】)

【表1】1948～86年のストライキ数

年	ストライキ数/年	年	ストライキ数
1948—51	34	1968—71	79
1952—55	28	1972—75	142
1956—59	38	1976—79	175
1960—63	62	1980—83	94
1964—67	64	1984—85	62

出所) Carl Stone, "Power, Policy and Politics in Independent Jamaica" in Rex Nettleford, ed., *Jamaica in Independence: Essays on the Early Years*, Kingston, Jamaica: Heinemann Caribbean / London: James Currey, p. 36.

彼の論文での出所は

*Statistical Yearbook, 1949—86*, Department of Statistics / Statistical Institute of Jamaica, Kingston.

労使関係は恒常的に険悪であるか、少なくとも葛藤を含んでいると言われ、労働者一般の攻撃性ないし闘争性が大きいことはよく知られている<sup>17)</sup>。労働者の権利意識は「非常に高く」、労働争議の発生も多い。

ストライキといった強硬手段はとらなくても、日常的な抵抗・反抗の手段は枚挙にいとまがない。これらの多くは、奴隸制時代より最も搾取されてきた層、すなわち奴隸が採用してきた「知恵」や方法を子孫代々継承し、それを現代に応用したものとも言える。

奴隸制時代には、生理的緊急性さえ有効利用された。たとえば「頻繁に草むらに行き」、排便排尿に時間をかける、ひどい月経痛や妊娠に伴う体調

17) ジャマイカ人は他のカリブ海地域の住民よりも攻撃的だという言説は、実はジャマイカ人以外の間でよく言及されることである。それにもまして興味深いのは、そのことも少なからぬ層のジャマイカ人自身の間で認められていて、それを「プライドの高さ」として誇る人さえいることである。

ストライキに至らなくても、“go-slow”と呼ばれる仕事の故意の遅滞/遅延もよく行われた。先進資本主義諸国の基準からすれば、そうでなくてもかなり「ノンビリ社会」であるのに、“go-slow”が行われるとさらにそれが輪をかけたようになるので、「全く仕事にならない」。

の不全を訴える、出産後は特に授乳に時間をかけ、また長期化する<sup>18)</sup>といったことなどは知られている。これらはその場限りの労働回避で、究極的には現状維持、すなわち奴隷制の消極的な肯定にいきつく、といった見方もあろうが、その場で可能な限り知恵を絞り、簡単に相手の言いなりにはならない、何らかの形で主体的に抵抗しているというのならば、それはそれで積極的に評価すべきであろう<sup>19)</sup>。

同類のことは現代でも観察される。故意の作業の遅滞、「仕事」/「用事」と称するおしゃべり、許容範囲内での頻繁な労働の中断（用便その他の所用のためなど）、（交通渋滞などによる）遅刻や（やはり様々な理由による）早退、傷病などによる欠勤、「身内」（遠くの親戚、時にはほとんど無関係の縁者も含む）の冠婚葬祭への出席など、考えつくだけの理由（口実）があげられる。まるで狐と狸の化かし合いのような雇用者と被雇用者間のドラマが日々展開されることにもなる<sup>20)</sup>。先進諸国人の眼からみると彼らは「怠

18) 奴隷制時代、奴隷の子供の誕生を経済効果で考える傾向があった。プランテーションで生まれた子供はクリオールである。奴隷の間では、自らと同じ悲惨な境遇に子供を生み落とすのはどうしても耐えられない、などと奴隷状態に絶望して、墮胎や嬰兒殺しも少なからず行われた。奴隷の待遇が劣悪で、労働者としての寿命も必然的に短くなった時期は、子供を生ませるより新規にアフリカから買う方が安くつくかその逆かを「計算」して、その方針を決めた。「生むより買う方が安い」と言われた時期は、奴隷は酷使され続け、使い捨て同様だったわけである。クリオール奴隷は新生児から幼児にかけては扶養費もかなり高くつくが、無事成長すれば、10歳前後から男女共に、有能で操縦しやすい労働力になりうると考えられた。なぜなら、言語や社会的行為もプランテーションという（完全にではないが）一種作為的に管理された特殊な状況設定の中で行われるので、支配者の言語をよく理解しない新来のアフリカ人よりは、クリオール奴隷には言語的障壁がほとんどない。命令や監督もしやすく、また文化的適応もスムーズであるはずだと考えられたのである。女性は、ある場合は主人その他の支配者階級の大屋敷（Great House）の家内奴隷として、また性の相手としても使用された。さらに子供を産んで、労働力人口の増加、そして（プランテーション作物の）生産力の増加、つまりプランテーションの発展、繁栄につながりうる、とみなされたりした。

19) 奴隷制時代から現代にまで続く様々な抵抗のあり方の一部については、拙稿「奴隷たちの世界——植民地期ジャマイカのクリオール社会と文化」石塚編『カリブ海世界』世界思想社 1991年（pp. 81—148）も参照されたい。

20) ブラック・ユーモアに富んだ *The How to Be Jamaican Handbook* (The Jamrite Cultural Dissemination Committee [K. Robinson, H. Walcott, T. Fearon,],

Kingston: Jamrite Publications, 1987) の “The Upper St. Andrew Housewife” という章には、典型的なキングストン郊外の山の手の中流階級の主婦が、一見贅沢で「怠惰」とみなされてはいるが、実際、一家のボスとしていかに召使いたち (helpers: たとえば料理人、庭師、ナニー、日雇い労働者) と対峙するかなどについてエッセンスを提出している。たとえば以下のようなことにいつも気を配らなくてはならず、「気狂いのようなペースで明け方から黄昏まで、信じがたいほど多岐にわたる問題と危機を解決しようとしている。」(p. 18) 少し長くなるが引用しよう。

- ・メイド (helper) に、朝食の準備をさせる。
- ・ “ ” に子供のお弁当箱に何と何を入れるか言う。
- ・庭師に今日すべき用事を言いつける。
- ・メイドの石頭に、どのようにしたら掃除、ほこり落とし、洗濯、アイロンをする彼女のやり方が全くもって不十分であることを教えつつも、自らが実際にしてみせてしまうほど品位を貶めるそそをしなないようにする。
- ・テニスをする、美容室へ行く、ドレスメーカーの所に行く、PTA の会合に出席する、子供を学校へ迎えに行くということすべてを1日のうちにうまく済ませる。〔筆者注：子供の学校（主に私立）への送迎は主に「持てる階層」の母親の役割である。父親がすることもあるが、「専業主婦」であれば母親の仕事の1つとして数えられることの方が多い。〕
- ・メイドがお茶の時間の来客へ茶菓を準備するのを監督している間に、別の募金活動のためのティー・パーティをどうやって開こうかと思案する。
- ・メイドが夕食の準備をしているのを監督しつつ、お茶に招いた客たちと重要な事柄についてどう話し合おうかと思案する。
- ・メイドが帰宅する前に、自分のかばんにこっそり食物を入れてしまおうとするのを現行犯で捕まえようと、常に台所に目をやりつつ、夫にはどうやったら魅惑的で、なまめかしく、喜ばせてあげられるかと気を使う。

この章にはその他、居住地区、容貌・外見、際立った特徴、好みの活動、根本的な規準という項目がある。

実は彼女たちの役割は重要である。それは、「入手できる情報量の補足にあたり、危急の国家の一大事に関するコミュニケーションのプロセスをおしなべて助けることだ。たとえば、誰の夫が誰の妻と寝て、誰の夫が誰の夫と、また誰の妻が誰の妻と寝て、といったことだ。このような情報はもちろんベランダでお茶を飲みながら伝えられる。」

召使いが関連してくるところもある。たとえば山の手の中流階級の主婦は、容貌・外見では、「皮膚の色は明るい茶色で(筆者注：つまり混血で、召使い層の大多数がそうである真っ黒の黒人ではない)、丸々とした眼をもち、その小さくて快活な口は、パーティではすばやく開いたり閉じたりするものの、召使いを呼ぶときは軽蔑のためにひん曲がる。」また、好みの活動ではその5番目に、「召使いを叱りつける」、6番目は「他の山の手の主婦たちと今日の召使いの欠点を話し合う」。そして根本的な規準としては、第1に「すべての召使いにできるだけ少ないお金を支払うこと」(p. 19) とある。

慢」、「嘘つき」、「ずる賢い」、「無能」の化身でしかなく、多くの見当違いの批判も浴びてきた。しかしそこにこそ、彼らのカモフラージュされた主体的な抵抗の一部を垣間見ることにもできるわけである。私たちは、日常行為の実践のなかで、多少なりとも類似の経験をしているわけでもあるが、彼らの「悪弊」とされる行為や態度の背後にある歴史的、社会・経済的、政治的、文化的要因を十分知らなければ、レゲエの世界も十分に理解し、共感することはできないだろう。

## 2. 暴動

このような状況では、いつ暴動が起きてもおかしくはなかった。もっともジャマイカは奴隷制時代より、奴隷反乱の頻度と規模の大きさにおいてはすこぶる有名であった。

奴隷制廃止以降も、ジャマイカ史上の重要な事件の1つ、1865年に起きた「モラント・ベイの反乱」(Morant Bay Rebellion)では、やはり貧しい黒人下層階級が圧政と窮乏に抗議して立ち上がった。大きな物的損害と数多くの死傷者を出し、その鎮圧のためには軍隊も動員された<sup>21)</sup>。反乱のり

21) 峰起の主導者ポール・ボーグルはエア (Edward Eyre) 総督へ抗議するため、スパニッシュ・タウンまで72kmの道のりを代表団の先頭に立って行進したが、会ってもらえなかった。しばらくして、彼は400人を率いて、今度はモラント・ベイ裁判所を行進した。このときは、モラント・ベイのあるセント・トマス行政教区の武装自警団と暴力的な激突となり、この間、(裁判所の)管理者を含む重要市民たちも殺害された。抑圧と不義のシンボルであった裁判所は「暴徒」と化した抗議者たちによって焼き落とされ、総督の権威に大きな挑戦状が突き付けられたのだ。総督は戒厳令を布告し、兵士を召集。影武者と睨んだゴードンを逮捕し、反逆罪である消失した裁判所の真ん中で絞首刑を執行させた。その2日後、ボーグルとその副官も同様に処刑して、反逆者へのみせしめとした。

リーダーたちの処刑後、貧民への報復的武力行使は凄惨をきわめ、兵士たちより殺害され処刑された男女は430人を越し、また兵士が焼き払った家屋は1,000軒を越した。

このような過敏で行き過ぎた行動とゴードン議員の立証不在の「反逆罪」による処刑などは、ジャマイカ総督自身の冷酷さと無能さのみならず、植民地議会と政府の未成熟を露呈するものと英本国政府はみなすことになる。この件で総督はリコールされ、ジャマイカは英国直轄植民地となった。多大な犠牲が払われたものの、英本国はジャマイカ人の社会・経済状態に意を払うようになり、いくつかの改善がみられることになった。

ーダーとされたバプティスト派の執事 (deacon) であり、裕福な小農民だったポール・ボグル (Paul Bogle) や、スコットランド人プランター (父) と奴隷 (母) との混血で、富裕な商人そしてプランター、しかもジャマイカ議会の議員であったジョージ・W・ゴードン (George William Gordon)<sup>22)</sup> は絞首刑にされた<sup>23)</sup>。

世紀転換期にも、ジャマイカ社会を激動させる大衆による一種の抵抗運動がみられた。なかでも、宗教的な装いも顕著だったマーカス・ガーヴィー (Marcus M. Garvey) やアレグザンダー・ベドワード (Alexander Bedward) が著名なリーダーとなった2つの運動は、様々な面できわめて重要な意味をもっている<sup>24)</sup>。

22) 彼についての著作は少ないが、たとえば Ansell Hart, *The Life of George William Gordon*, n.d., Kingston: Institute of Jamaica. 参照。

23) ボグルは、当時最も貧困な地域の1つと言われた、セント・トマス教区のストーンニー・ガットに住んでいた。バプティスト教会は黒人の間でジャマイカの宣教当初から根強い人気を誇り、いくつかの土着派 (native) 教会も生んだほど強い影響力を及ぼしてきた。彼は執事に選任されるだけの人望を集めており、リーダーとしての特質も備えていたらしい。それゆえ、人々は彼にスポークスマンになってほしいと依頼したのだった。

彼の像は現在、モーラント・ベイ裁判所の前に建てられている。その怒りに満ちた厳しい表情と、両肘を高く張り、両手で刀を下方に向かって握りしめている姿は、全体が十字架の形とみることもできて、きわめて象徴的である。

ゴードンは混血 (ムラト) ゆえ、自身は上層階級に完全に受け入れられていたわけではない。しかし、努力して立身出世の道を歩み、経済的にも社会的にも一応の成功を収めていた。このような混血層のなかには、自らの出自を気にして、できる限り低い階層の黒人奴隷やその子孫からの隔絶に意を払う人々も少なからずいたが、彼は母と同様の身の上、貧困層に深い同情を寄せていた。そのため、議会で立ち上がったのであるが、その態度と発言が総督を怒らせたのだった。当時、黒人貧困層と抑圧的なジャマイカ政府、特に地方行政担当者たちとは険悪な関係にあった。1860年代は不況や失業が蔓延し、米国の南北戦争のあおりを受けて、輸入品の物価が急上昇して追い打ちをかけるなど、特に貧困層には経済的に苦しい状況が続いていた。また重税が課せられ、現金収入の道もあまりないなど、暴動は一触即発の状態であったといつてよい。その上、地方裁判所では不正や不義が多々行われていたのだった。

この時のことは久しく語り継がれ、また民謡にもなるほど、人々の記憶に長くとどめられている。反乱の首謀者たちは独立後、国家英雄に祀り上げられている。

24) ガーヴィーはアフリカ・メソヂスト監督 (エписコパル) 教会と関係し、ベドワードは土着バプティスト教会を率いた。

1930年代、特に1935—38年には、ジャマイカのみならず他のカリブ海英語圏社会でも労働争議が多く起こった<sup>25)</sup>。ジャマイカでの一連の動乱には激しいものがあったが、政治史上にもきわめて重要なメルクマールを残すことになる。これらの中から労働組合運動が生まれ、二大政党の基盤ともなるバスタマンテ産業労働組合(BITU, 1939年登録)と全国労働者組合(NWU, 1952年登録)が結成される<sup>26)</sup>。

より現代に目を向けると、特に1960年代は、レゲエと一体感を強めつつあったラスタファリ運動とのからみにおいて、悪名轟かせるいくつかの血なまぐさい事件が起き<sup>27)</sup>、社会不穏の度は高まっていった。

1962年の独立以降の大きな暴動として有名なのは、まず1965年8—9月にキングストンで起きた、別名「中国人暴動」(Chinese riots)<sup>28)</sup>である。

25) この時期を「革命的」と呼ぶ研究者たちもいる。

26) BITUはアレグザンダー・バスタマンテ(Alexander Bustamante)、NWUはノーマン・マンリー(Norman Manley)がリーダーであった。各組合のリーダーは政党のリーダーともなり、政界と労働界はJLP/BITU、PNP/NWU系に二分されることになった。1938年のゼネストにより一連の不穏な労働者の動きは最高潮に達する。これらの動向についての著作は多いが、たとえばKen Post, *Arise Ye Starvelings: the Jamaican Labour Rebellion of 1939 and its Aftermath*, 1978, The Hague / Boston / London: Martinus Nijhoff; W. Arthur Lewis, *Labour in the West Indies: the Birth of a Workers Movement*, 1977, London: New Beacon Books. (初版は1938、Fabian Society版。1977年にはSusan Craig, “Afterword”とThe Moyne Commission in Barbados: An Excerpt. も付いている版がある。)

27) 1950年代末からは、ラスタファリ運動の拡張に伴い、世を騒がせた事件が続々と起こっていた。1963年4月には、観光都市として有名なモンテゴ・ベイ近くのコーラル・ガーデンズで、ラスタファリアンによって、警察官と「善良な市民」数名が殺された「コーラル・ガーデンズの虐殺」(別名「聖木曜日の虐殺」)事件が大々的に報道された。

28) おもにキングストンに居住し、商業活動に従事していた中国系は、19世紀半ば以降に年期奉公人としてジャマイカに渡来し、年期あけ後も残留した人々の子孫である。彼らも定着するにしたがって次第にクリオール化していったが、他の人種・民族集団から見ると、言語や民族文化への固執が強く、偏狭だとみなされる傾向があった。しかも人数のわりには経済的に成功する者が多く、彼らに対する偏見と、違和感、羨望、嫉妬、怨恨が同居する感情が潜在していた。この暴動は元来、中国人を直接狙ったものではなかったが、黒人たちが社会の不平等感をそれまで以上に集合的に強めていくなかで、堅固で扱いにくい大支配体制そのものへの強い抗議とともに、中国系をより手中に収めやすいスケープゴートとして見いだすことになった。それはすでに煽られていた経済的に恵まれない黒人系住民の怒りと結びつき、社会景観

約半年後には「西キングストン戦争」(West Kingston war)と呼ばれたキングストン西部のスラム地区で起きたもので、これは政治的要素が大きく絡んだものだった。そして1968年10月には、やはりキングストンを拠点としたもので、ウォルター・ロドニー「事件」・「暴動」([Walter]Rodney affairs/riots)として国外にも知れ渡り、後に続く社会・政治的動向に大きな影響を与えたものが続く<sup>29)</sup>。これによって引き起こされた、あるいは深く関連して起きた学生運動、黒人の意識覚醒運動、特に都市のスラムを中心にした下層労働者や失業者による騒乱は、ジャマイカ社会を文字通り震撼させた。

この一連の社会文化運動は、住民の政治意識の変革ももたらしていた。それまでの先進資本主義諸国追従型の自由経済による発展を目指した、しかも多国籍企業の餌食になることさえ(持てる階層、土地を含めた資本保持者に利益になるならば)目をつぶらざるをえなかったジャマイカ労働党(Jamaica Labour Party, JLP)<sup>30)</sup>政権は、独立以降の礎を築きはしたものの、人気を凋落することになる。この時期のJLP政権の失策や腐敗ぶりを嘲笑するようなジャマイカ初のポピュラー音楽でレゲエの前身となったスカァ(ska)<sup>31)</sup>の曲として、たとえば“Carry Go Bring Back”なども作

の中で目立った存在であった中国系の店舗やその他の建物(コミュニティ・ホール中華会館やレストラン、商店には中国語が書かれていた)が主な掠奪の対象になったのである。それ以降、中国系はますます黒人系に対して恐れ、軽蔑、嫌悪感を強めていったといわれる。店舗の多くはカウンターに太い針金の格子戸を常備し、店の人と客は金網越しに直面することが多くなった。黒人系と中国系の交婚(inter-marriage)や混血の誕生も決して珍しくはないが、中国系は自民族集団内か非黒人系との結婚を望む傾向が強い。またこのような交婚が失敗したり、問題があったときには、この異人種・民族間結婚に原因を求めようとすることも多い。

29) 1960年代の動きを分析したものは数多いが、Nettleford (1970) や Katrin Norris, *Jamaica; The Search for an Identity*, 1962, London: Oxford U.P., なども参照。小説 N.O. Williams, *Ikael Torass*, 1976, La Habana, Cuba: Casa de las Américas にもこれらの社会的動きはよく捉えられて活写されている。cf. 拙稿「カリブ海黒人意識のうねり——ジャマイカのナショナル・アイデンティティと『アフリカ』を中心に」小田英郎 矢内原勝編『アフリカ ラテンアメリカ関係の史的展開』慶応義塾大学地域研究センター/平凡社 1989年。ロドニーについては拙稿「希望の星——ウォルター・ロドニー【ガイアナ】」「41人の英雄たち——民族の誇り」国際開発ジャーナル社 1993年も参照されたい。

30) 政党結成は1943年。

31) 現地では「スキヤァ」と発音されることが多い。JLP 党首で首相だったバスタマン

られ、大ヒットしたほどである。

### 3. 「変革」と挫折

1972年には、権力掌握の2年後からラディカルな社会民主主義政策を打ち出していく人民国家党 (People's National Party, PNP)<sup>32)</sup> 政権が誕生し、政府は経済・社会統制に乗り出していく。大資本や多国籍企業の接收・国有化を次々と実行し、言論統制もある部門では行なうなど、政府主導で「社会的公平」へ向けての大がかりな断行がなされた。首相で党首だったマイケル・マンリー (Michael Manley)<sup>33)</sup> は、旧約聖書のヨシュアに自らをなぞらえ、カリスマ的なリーダーとして、救世主のイメージを様々な聖書のアレゴリーを駆使しながら国民にアピールし、亡びゆく小国の舵取を難航したのだった<sup>34)</sup>。

1976年総選挙でも一応の勝利を収めたマンリーと PNP であるが、2 期目に入るとさすがの彼のカリスマ性も衰えていく。国際政治舞台では非同盟諸国との連帯を強め、特にキューバと親交を結び<sup>35)</sup>、対米関係は険悪になったが、国内でも「政治改革」の名の下に数々の試行錯誤が繰り返された。まもなく1975年以降の石油ショックも加わる。経済状況は悪化の一途を辿

ても諷刺の対象となった。

- 32) 政党結成は1938年。JLP と PNP の初代党首 (Bustamante, N. Manley) はイトコ同士の仲であった。現在 2 人とも国家英雄に称えられている。
- 33) ノーマン・マンリーの息子。1924年生まれ。その後も1988~92年に政権をとった折に、首相を務めたりしたが、途中で病気のため引退し、1997年3月6日、病死した。享年75歳。カリブ海社会の政治界の重鎮の1人と数えられてよい人物である。彼についての著書も多いが、諷刺的な Christopher Arawak, *Jamaica's Michael Manley: Messiah... Muddler... or Marionette*, 1980, Miami, Sir Henry Morgan Press, のタイトルにも如実にあらわれているように、彼のリーダーシップ及び業績への見方は様々にある。ちなみに著者の Arawak は、ジャマイカの先住民族名と同名である。この本の出版社名と出版地も、意味深長である。
- 34) 特に1976年総選挙時のキャンペーン合戦はつとに有名である。
- 35) この時期、多くの若者が「若者部隊」(“Young Brigade”)としてキューバに送られ、イデオロギー教育と土木建設などの労働に従事したりした。特にキューバ東部のオリエンテ州のあたりは、黒人が多い地区として有名であるが、ここを中心に滞在していた、と元「若者部隊」のメンバーの1人から聞いた。またキューバからも「専門家」と称する人々が特権を与えられてジャマイカに滞在していたが、反共・親米派の人々の悪口雑言の格好の対象になっていた。

り、恒常的財政赤字、膨大な累積債務と構造調整の困難に直面した政府は、IMF や世界銀行に対しても強硬な態度で臨み、借款の条件として突きつけられた諸ハードル全てをクリアーすることもできず、歪みを一層大規模化していった。

1970年代末は、食料品を含めた生活必需品の不足<sup>36)</sup>、「ロケット・インフレ」と呼ばれたほどの諸物価高騰、20数%とまことしやかに語られたほどの慢性的な失業率などに顕著に見られるように、庶民の生活への圧迫はますますその度合を強めていった<sup>37)</sup>。頻繁なる停電や多種のストライキ、道路封鎖などで、あたりまえの日常生活も確保できる状況ではなかった。無法状態になったところもあり、命の危険さえ身に迫って感じるほど、不安と緊張の連続の日々もあった。“exodus” と呼ばれたこの間の大量の頭脳流出、資本・技術流出には目に余るものがあったが、それもゆえなしとしない。一時的にマイアミ等に避難してジャマイカ情勢を静観し、状況が好転すればまた帰国したい、という愛国的市民は大勢いたのであるが。

ちなみに1980年10月に地滑りの勝利を収めた JLP 政権は、シリア・レバノン系のエドワード・シアーガ (Edward Seaga) を首相として、それまでとは正反対の方向転換をし、米国中心の自由主義経済へ移行させ、あからさまな米国追従路線をとった<sup>38)</sup>。経済再建最優先のスローガンを掲げ、当初の滑り出しは好調に見えたものの、しばらくするとまたしてもインフレや失業などが悪化、ジャマイカ・ドル安も顕著になり、庶民の生活はかなり圧迫されるようになった。1985年1月に全国規模で暴動がまた発生したのも、このような生活の困窮や社会的欲求不満の蓄積によるところが大きかった。

#### 4. 政治暴力

1970年代は特に政治的暴力においても目に余るものがあり、社会不穏は

36) がらんとした棚に並べてあった方がまだ品不足の強烈な印象をやわらげると思ったのか、食料品が店のなかで腐敗したまま放置されていたのを、筆者はよく目撃した。

37) 拙稿「10セントの物乞い」『国際協力』1980年10月号、「80年ジャマイカ総選挙を見て——経済悪化と社会主義政権の終焉」『アジア経済』22巻8号1981年8月。

38) 1983年10月の米国グレナダ侵攻にも加勢した。

ただならぬ様相を呈していた。

『レゲエ・ブラッドラインズ』を執筆したアメリカ人ジャーナリスト、S・デイヴィスらは、その取材を主に1976年の冬に行なったが、次のように告白している。

私たちの滞在中に、ジャマイカの政情に変化が起こった。激化していた不平分子の街頭でのゲリラ活動、過激化を強め、夜のキングストンは完全に闇の街と化してしまった。ダンス集会は禁止され、いくつかのナイトクラブも閉鎖された。…何とか対処しようと苦悩する国全体の緊張感が、ひしひしと迫ってくる<sup>39)</sup>。

ジャマイカでは、特に選挙前に政治的緊張が急速に高まり、二大政党間の争いが激化するのが恒例の現象である。キャンペーン中には、政党の幹部などリーダー的存在の元に奉仕する忠実なほどの党员をはじめ、「お抱えの」ギャング集団<sup>40)</sup>も荷担し、凄惨をきわめる銃撃戦さえ展開される。選挙区内の有権者数と当該住民の政治意識の大勢(特に JLP 側か PNP 側か)が把握され、獲得票数の操作のため、多人数を収容する老人ホームが焼かれたりしたこともある<sup>41)</sup>。

筆者のジャマイカ滞在中にも、銃弾の発砲音、サイレンの音、緊急の事態を知らせる人声がよく交錯する時期があった。日中でも人通りがほとんどなく、ゴーストタウン化した街区もあった。その住人はしかたがないものの、通りを隔てて敵対する政党の陣営に属するような所には「近寄るべからず」と警告しあうのが常識であった。(住民は「××町は PNP、△△町は JLP」という表現をしていた。)投票日が近づくにつれ、党员以外の一般住民にもかなり危険が迫り、政府の勧告により、居住区ぐるみで軍用トラックに数少ない家財と共に詰め込まれて一時避難する光景も、キングス

39) S. デイヴィス、P. サイモン『レゲエ・ブラッドラインズ』中江 訳 ブルース・インターアクションズ、1986年 (Stephen Davis and Peter Simon, *Reggae Bloodlines: In Search of the Music and Culture of Jamaica*, c. 1977.), p. 11.

40) 拙稿「ノー・ウーマン・ノー・クライ」『大阪学院大学 国際学論集』第6巻第2号 1995年12月も参照されたい。

41) 1980年の総選挙前のエヴァンタイド老人ホーム焼失事件は、日本の新聞でも報道された。

トンのあちこちで見られたものだった。

住民は政治家のパワー・ゲームに翻弄され、力ないし権力とはいったい何なのかについて、誤った見解を植え付けられてしまうほどであった。「政治暴力」という言葉が頻繁に語られるほど、ある面では日常化されている社会でもある。

「バーニン・アン・ルーティン」は、このように社会的欲求不満が渦巻き、暴動が起きやすい熱した社会情勢から生まれ、人々の不安、かなしみ、憤怒を表現する。繰り返し歌われる「今夜泣き、泣き叫び」、「俺たち、長い長い年月、苦しんできた」という表現は、決して大げさではない。各行に込められている情感とリアリティは、実は幾層にも重なる個々人の波乱万丈の人生の集積でもあり、それらから抽出されたエッセンスでもあり、そして万華鏡のようなイメージが盛り込まれている。それらの詳細をここで展開する余裕はない。ただ本稿では、焼き討ちや掠奪の被害者ともなってきた歴史的集合名称でもある「俺たち」が同様の報復をせざるをえない理由を、「暴力の制服姿」と象徴的に表現されるものを探ってみよう。歌詞で批判のやり玉に挙げられる「暴力の制服姿」は、たとえば第1スタンザにある囚人と警察官にも該当する<sup>42)</sup>。

### III. 暴力の制服姿

制服、それは着る人の性格や志向、考え方まで即座に変えてしまうほどの魔的力をもっているようだ。ここで描かれる囚われの身と捕えた身について考えると、双方ともに制服姿が連想される。

#### 1. 制服と暴力

第1スタンザ第4節にある「奴らはみな暴力の制服姿だったのさ」(“They were all dressed in uniforms”)では、「暴力」・残虐性 (brutality) と制服

42) ただし紙面の関係で、「暴力の制服姿」の別の姿や側面 (たとえば司法職 [裁判官]、教会の聖職者など)、また第2スタンザの「川」、「汚れ」(pollution)、「幻影」(illusion) については別稿で扱う。

(姿) ([in] uniforms) が微妙に重なり合う関係を示唆している。ここでは「暴力」は「制服姿」をとるという見方、また、「制服姿」は暴力的だ、あるいは暴力を孕むという見方ができる。

“They” は、まずこの詩の主人公を捕えた人々である。彼の見張り役でもあり、上から見下ろして (“standing over me”)、彼には見分けもつかない姿をとっている。それを具体的に警察官だと把握することはできる。しかしそれ以上に、「見分けもつかない」というその匿名性の方をむしろ重視した方が、相手のつかみどころのなさやおぞましさをかえってよく把握できるかもしれない。至近距離にいて具体性を帯びていながら、その具体的なものを象徴する統括的「システム」と権威は、暗闇のなかにいるものだからである。

暴虐 “brutality” という表現は、よくラスタファリアン (以下、ラスタ) をはじめとする社会の底辺層、また底辺ではなくとも社会的スティグマを負わせられた人々やいわゆる「周辺人 (marginal men)」が、世間の規範や「常識」、そして「システム」から逸脱しているという理由だけのために受けてきた数々の「非情な」仕打ちに対してよく使われている。(【図1】も参照) 彼らはことあるごとに「システム」側の不義や悪徳のスケープゴートにされていたからである。これには物理的な力の行使<sup>43)</sup>と精神的な打撃<sup>44)</sup>の両方が含まれる。残虐性・暴力(性)は根深い残忍さ、致命的身体的損傷、そして殺人行為まで含む。それらが制服姿の人間によってなされている、という悲痛な嘆きと叫びをここで聞き取ることができるのである。

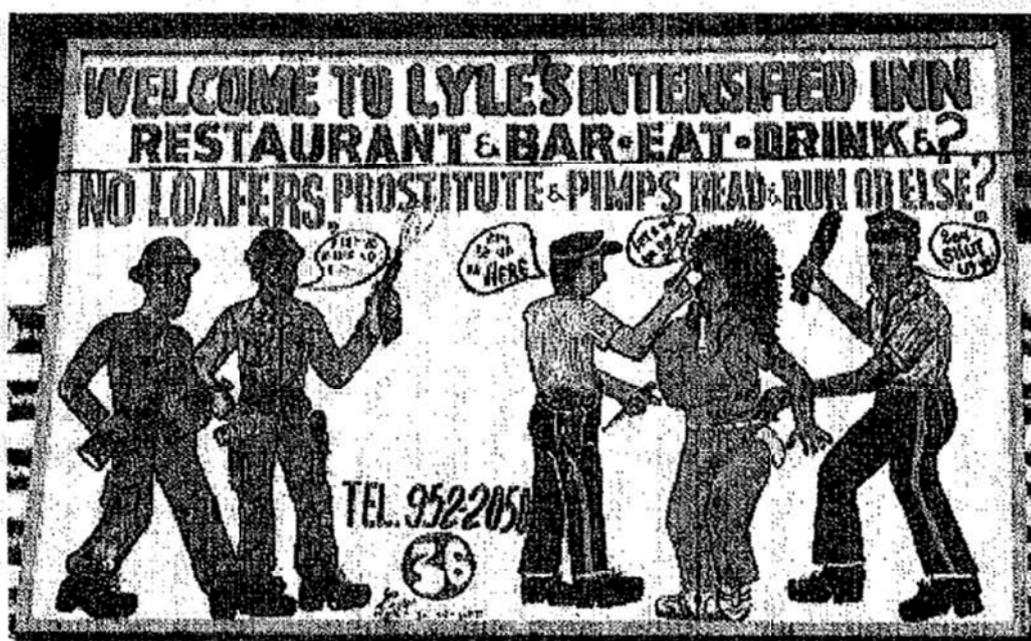
## 2. 囚われの身

第2行目で囚人だった自分の身の上を紹介される。囚人・服役囚の待遇

43) 力づくで身体の一部を掴まれて振り回されたり、足蹴にされたり、足を引っかけられて転ばされたり、突き飛ばされたり、あるいは殴られて倒されたり、彼らの権威と力の象徴でもある銃器を突きつけられつつ以上のような行為をこうむったり、と実際の状況の描写をすれば枚挙にいとまがないであろう。

44) 言葉の暴力や、無視、白眼視、疎外、嫌悪、侮辱、忌避を示唆する身ぶり、態度、明瞭なあるいは暗黙になされる(当然享受できるはずの権利の剝奪といった)差別、スティグマを張りつけるなど。

【図1】ラスタ、警察官、兵士



この看板の3段目の文字、絵に注目されたい。ドレッドのラスタは赤いシャツ、緑色のズボン、黄色の靴とお札（ポケットから出ているもの）、ラスタ・カラーのベルト姿。警察官は赤い線の入った黒い制帽、ズボン、靴、水色のシャツ姿。兵士は迷彩色の制服姿。1人の警察官は右手の棍棒を振り上げ、左手はラスタのシャツを捕まえ、もう1人は右腰に大きなピストルをぶら下げ、左手には鋭い刃のナイフを突き出している。兵士の1人は銃を構え、もう1人はピストルを威嚇射撃している。

出典) Paul Zach, ed., *Insight Guide : Jamaica*, 1989, Singapore : APA Publications (HK) Ltd., p. 205. 罪の有無にかかわらず、実際に囚人・囚われの身となった人は少なくないようだ。その悲哀と釈放の歓喜は、次節で触れる「ダビーの征服者」にも表現されているとおりでである。

にまつわる逸話は実は数知れなく存在し、関係者やその周辺では酷評の対象である。

スカアのヒット曲「5446 (が俺の [囚人] 番号)」<sup>45)</sup> にもあるように、囚人は個人の名さえ失われ、番号でしか呼ばれない。囚われるとは、個人のアイデンティティの剥奪が意図されることなのである。

45) トーツ (Toots) の歌。彼はメイタルズ (Maytals) というコーラス・グループを率いて、初期のレゲエのヒット曲を数多く発表した。またレゲエというジャンルが確立される以前のジャマイカのポピュラー音楽、ロック・ステディ (Rock-steady) [スカアの次の形態] のものであるが、「レゲエ」という名をはじめて用いた曲は彼らの「Do The Reggae」といわれている。

また彼(ら)が何によって囚われているのかが問題にされなくてはならない。「5446」にも絡んでくるが、その筆頭は「システム」によってである。告発者は、一般の人々も意識していようとしまいと実は経験しているものなのだ、と警告していると解釈できる。しかも気づいてみたら(「目覚める」)囚われの身である、というような巧妙な仕掛けが存在するのだ。そしてその非人格化プロセスはまことに恐ろしい。

ここで社会の「システム」(shit-stim)とは、以前その一部について簡単に紹介したが<sup>46)</sup>、分裂を常に招く「利己的」主義主張(ism, skism)による悪弊の堆積でもある。その内容の中に奴隷制、貧困、(新)植民地主義、政治、教会、といった要素がリストアップされている。制服姿とは、「システム」の側にいてそれを体現し、具現化しているものである。その先鋒に警察官もいる。

「システム」あるいは「バビロン・システム」<sup>47)</sup>は、実はラスタの造語である。ラスタは自らを「黒いユダヤ人」、「真のキリスト教徒」などと同一

---

以下に、ジャマイカ人のあるインフォーマントに書き出してもらった歌詞の一部をもとに、興味深い箇所を提示する。

...

Get your hands in the air, sir,  
And you will get no hurt, mister, no no no

...

Give it to the police man  
I wouldn't do that, I never do that

...

Want to put the charge on me

...

I am not a fool to hurt myself  
for I was innocent for what they done to me  
They was wrong  
(Answer to me, one more time)

...

5446 was my number, oh yeah,  
Right now someone else has that number

...

46) 拙稿「ノー・ウーマン・ノー・クライ」pp. 29—30。

47) 同タイトルの歌詞はB. マーリーによる。

視し、聖書的規範を絶対視する。偽善を嫌う彼らは、ジャマイカを不正と邪悪と悪徳の権力に満ちて墮落した虚栄の社会であり、旧約聖書で描写されているバビロンと同じだとみなしてきた。そして「バビロン」の絶対神への背信の罪は許され難い、と断罪する。

「バビロン・システム」の魔力は強烈で、一度囚われるとなかなか抜けられない。それは人を屈強に制度化された社会機構や組織体の一部に無意識的に組み込んでいく。その巨大マシンのほんの小さな歯車でしかない、限りなく無に等しい我身の存在に気づくことさえ不可能なほどだ。人は生まれ落ちると、この中に自然にはめ込まれてしまう。その文化的たがは見えざる牙をもって、「吸血鬼」<sup>48)</sup>のように「日々 子供たちの骨までしゃぶる」(sucking the children day by day)。そして「悩める者の生き血を吸いつつ」(sucking the blood of the sufferers)、大人になるまで、また大人になってからも、洗脳し続けるものなのだ。

たとえば、「システム」の定めた学校教育やキリスト教会は、「人を欺き、泥棒と人殺しを世に送り出し (graduating)」続けてきたと揶揄される<sup>49)</sup>。苦境を生き抜く知恵の源となってきた聖書の教えも、ヨーロッパ帝国主義の手垢がついたキリスト教会が強要する信仰を盲従したままでは、いつのまにかシステムに飼い慣らされてしまう。その機能と存続のために都合のよい人間ができ上がっていただけなのだ。政治(“politricks”)、警察、軍、司法などに代表される諸機構とともに大胆に非難されるゆえんである。

### 3. 警察官

ジャマイカの警察官の制服は、実ははた目に見てもスマートで、威厳を感じられる代物だ。それを纏いさえすれば悪者は神妙になり、罪の手も電光石火のごとく引っ込めなくてはならない。制服姿の警察官は威圧的に見渡し、徹底的に尋問する権利をもっている。とっさに身を翻して脱兎のご

48) この比喩的表現は、ポピュラー音楽がよく好むものの一つである。カリブソでもヒットチャートに載る曲に「吸血鬼」を多用したものがある。バルバドスでの一大行事 クロップ・オーヴァー (crop-over) (収穫祭) ではカリブソ・コンテストも行うのだが、1985年夏に行われた時の優勝曲のタイトルは“Vampire”だった。

49) 以上の引用は「バビロン・システム」より。

とく逃げようとしても、警棒がすばやく伸びるかもしれない。個人の素性や経歴、人種・民族的背景、信仰にかかわらず、この制服を着さえすれば、ジャマイカ政府の権威と力がものをいうことになる。

ところが、レゲエで描かれる警察官の制服は、社会の不正と戦い、悪に挑む心意気と実行力を示しているのではない。むしろ、「システム」の権力や権威をかさに着た「小心者たち」の見せかけの牽制力の誇示と、正義の意味やその目的の曖昧化と無効すら象徴することもある、とさえ訴えている。もちろん社会的強者、すなわちレゲエで痛烈で非情な批判の矛先を向けられる人々は、警察官がその制服の威力をより一層発揮すべきだ、と考えていることは断わっておく。

### 3—a. 権力の行使か「気まぐれ」か

歌の主人公を囚人にした張本人は明らかに警察官であり、彼(ら)は当局の強権行使の代理的存在である。スラム居住者の黒人たちによくあったことだが、戸外を「自由にほっつき歩く」ことさえ、挙動不審と咎められたりした。「自由でありたい」と願うだけであるのに、それさえままならぬ状況があった。同じくボブ・マーリーのヒット曲「反逆の音楽(午前3時の検問) Rebel Music (3 o'clock Road Block)」の歌詞にもあるとおりである<sup>50)</sup>。

警察官の機嫌を損ねたり、(怪しい、あるいはふてぶてしいと思われて)職務質問され、(その多くはまともな定職に就いているわけではないので)署に連行されるといったことは珍事ではなかった。ガンジャ(マリファナ)の不法栽培、仲介や取引、喫煙などに少しでも関わったことを否定できる人も少ない<sup>51)</sup>。

50) Why can't we roam this open country  
Oh why can't we be what we want to be  
We want to be free  
3 o'clock-roadblock,  
curfew  
⋮

51) 「国内での密売、国外持出し等に絡んだ犯罪は、年間4000件」を下らない。「警察及び軍は、大麻撲滅のための合同作戦を展開し、1989年には6千エーカー、90年には

しかし、取り締まる警察官の態度や方法も問題視されてきた。同じく「反逆の音楽」に、警察官への挑戦が吐かれている。「俺の魂 取り出して 探ってみなよ／俺の経歴 疑うならば チェックしろよ…」と<sup>52)</sup>。

現実には警察官はそれほど頻繁にパトロールしたり、尋問するわけでもない。彼らは居丈高に制服・制帽で身なりを整え、警棒やピストルをぶら下げてはいる。しかし、「ささいな」悪事は日常茶飯事であるから、軽度の過失などにいちいち関わっては身がもたないといわんばかりに、見逃すことが多かったというのが風聞である<sup>53)</sup>。また、取締りや取調べは「警察官の気の向くままに」なされていたという噂は、直接間接に筆者もたびたび聞かされたことである。

暴力を伴う警察官の強制尋問については、たとえばボブ・マーリーの「ダッピーの征服者」(Duppy Conqueror)<sup>54)</sup>にも描かれている。「責め」(accused)も「不正な虐待」(wrongly abused)も経験される。「鉄格子」(bars)の中

3.8千エーカー、91年には2.8千エーカーの大麻耕作地の破壊と90年には5万9千ポンドの大麻を押収した。また最近は、コロンビア等からのコカイン輸送の中継基地としても利用されている。」外務省「ジャマイカ概況」1996年, p. 21.

- 52) Take my soul and suss me out  
Check my life if I am in doubt

∴

And hey Mr. Cop, ain't got no  
(What you say down there)  
Ain't got no birth certificate on me now.

- 53) 警察官も別に待遇が良いわけではなく、「不満のため毎年新規採用以上が辞めていく」ので、定員不足の問題もある。外務省「ジャマイカ概況」1990年社会情勢欄参照。

- 54) ボブ・マーリー作詞 c. 1973年。

Yes, me friend  
We de a street again  
∴  
Dem sey we're free again  
The bars could not hold me  
Force could not control me, now  
They try to keep me down  
But Jah put I around  
Yes, I've been accused  
(many a times)  
And wrongly abused, now,

からの釈放は、そう簡単ではないことも示唆されている。しばしば出所した人たち——歌手その他の芸術家たちも含め——の口からの具体的な批判は、所詮「前科者のたわ言」などと一蹴され、深刻に扱われることはほとんどなかった。取調べのあり方のみならず、刑務所内の劣悪な環境、不公平や不公正、そして囚人の待遇の改善は、長らく強く要求されてきた問題である。

ところで、「自由の身」になり「街」に戻れた主人公が、勝ち誇ったように“I'm a duppy conqueror”と歌うとき、何を意味しているのだろうか。

ダピー (duppy) とは、ジャマイカで多くの人々が信じている西アフリカ起源の多様な姿をとる霊であり、恐れられている<sup>55)</sup>。ダピーのせいで死ぬこともあるとさえ信じられており、それに打ち勝つためには、伝統的な民間信仰でやはり力と影響を発揮するオビア (ウー) マン (obeah [wo]man) と呼ばれる呪師に依り頼む必要があると言われている。超自然的悪なる存在とみなされているダピーだが、それはこの歌では囚人の身にふりかかった全ての悪、「鉄格子」、「暴力」(force)、「不正な虐待」、そして旧来の因習に呪縛された「システム」そのものを象徴するものと解釈できるだろう。

そして、これらに真の意味で勝利できるのは「JAH」、「全能の神の力」(the powers of the most-high) のみであるというラスタファリ信仰告白がなされている<sup>56)</sup>。この信仰により、新天地を開眼させてくれるのが全能の至高神であり、「バビロン」は瓦壊し、「シオンの山」がそびえ立つようになるのである。

当時の政権や時勢に合った限りでの正義をふりかざして「気ままに」取り締まり、検挙し、逮捕し、監禁してきた警察官。レゲエのヒット曲をいくつか生み、まさにレゲエ世界のリアリティに溢れる映画『ハーダー・ゼ

55) 拙稿「ジャマイカ：ダピーとオビア」『月刊 言語』vol. 24, No. 10, 1995も参照されたい。ダピーは赤眼の犬、火を吐きながら鈴を鳴らし、ぞっとするような音をたてて疾走する牛、三本足の馬、人魚、巨大な乳房の女、そして人間の姿の死霊といった形がよく知られている。その行動はきわめて人間的であるが、残酷で、復讐もする（これも人間的であるが）と信じられている。

56) それは、同じ歌の中で、“I've got to reach Mt. Zion … the highest region” という節があるとおりに、(聖所のある)「シオンの山」に行く、というラスタファリ信仰に基づいている。

イ・カム』(THE HARDER THEY COME)<sup>57)</sup>でも描かれたように、彼らは違反・違法者側の一部と密接な関係をもっているとされる。情報や利益を提供しつつ、その権威や権力を最大の武器にして、「頃を見計らって」挑戦者に挑む。密告者をアメとムチで懐柔し、闇の情報と人員の動きのネットワークを掌握しようとする。挑戦者は即刻敵とみなされ、「生け捕り」か射殺により「正義」の勝利を一般民衆に見せつけることを是とする。もっとも「お尋ね者」や「悪漢」は、時の為政者や権力システムの権威者がそう規定するだけのことで、別の見方では殉教者的存在であるかもしれない。

また『ハーダー・ゼイ・カム』でも見られた場面だが、警察とガンジャ・トレーダー(仲買人)が共謀するという「事実」があった。映画ではたとえば、主人公がこの危険な商売に乗り出し始めた頃、バイクの後ろに乗っていて警察官の姿を見るや慌てるのだが、長年の経験者であるトレーダー兼運転手は、“wave”(=手を振って挨拶しろ)と言うだけだ。言われるままにそうすると、警察官は黙認する。ところが、主人公がそのトレーダーのボスの反感を買うようになると、ボスは警察の幹部に主人公を痛めつけるように嘆願する。何回となく繰り返された“wave”の黙認の信号は一転してしまう。即刻、追われる身となり、身の危険を感じた彼は、ピストルで警察官を射殺してしまう。警察と違法集団との癒着が問われ、警察側もその面子を保つためにいかに懐柔策を講じているかが暴露されている。

### 3-b. ラスタの個人的信仰の蹂躪

単に「システム」に相入れない、反抗的だというだけで存在の価値さえ否定されがちなラスタは、社会的弱者の代表とさえいえる。彼らは「システム」の権化としての警察の暴虐の格好の餌食になってきた。事例にはこと欠かないが、外見上の装いさえ標的にされたことも多々あった。(【図1】も参照)

ラスタのなかでドレッドロックス(dread-locks)<sup>58)</sup>は、これまでもたび

57) 拙稿「ノー・ウーマン」p. 23 (注32) 参照。

58) 髪自体を指すこともあれば、その髪を有する人も指す。当初彼らはロックスマン(locksmen)と呼ばれたが、今は「ドレッド・ロックス」他、「ナッティ・ドレッド」(natty / knotty dread)、あるいは単に「ドレッド」と呼ばれる。

たび社会の汚点とみなされてきた。ある個人は警察官に何も言われず、されもしないが、別の人は突然検挙されたりする。同一人物でも時と場合によって、彼らの暴力の対象になってしまう。

それが特にタム(tam)<sup>59)</sup>やターバンなどで被われていない剥き出しのままとなおさらである。「見苦しい」、「けがらわしい」といったごく私的な理由で、その場で鋭利な刃物でロックスをメッタ切りされた、という「事件」さえ時々起きた。これは「ドレッド」たちにとってはまさに暴虐、残忍な虐待以外の何ものでもなかった。なぜなら彼らにとって、「髪に刃を当てない」、「くし剃らない」<sup>60)</sup>長髪<sup>61)</sup>こそ、神の望まれる最も神聖な姿であるからである。彼らは憲法で保障されているはずの個人の信仰の自由の権利の蹂躪そのものに相当すると断固抗議したが、とりつくしまもなかったという<sup>62)</sup>。髪のみでなく、髭についても同様のことがあった。

それは特に1957年頃以降、ドレッドロックス姿のラスタが街頭で目立ち始め、さらにこの数が急増するにつれ、一般大衆の「恐怖」や嫌悪感もいや増したことも関係がある。60年代の諸潮流は、レゲエの発展や人気の急増と深く絡みながら、ラスタファリ運動の進展にも拍車をかけた。それはシステムや世間の保守層の反発を引き起こしながらも、青年層を中心に大きなインパクトを与え続けていた。特にM・マンリー主導のPNP政権に交代してからというものの、70年代末に至るまで、住民各層の考え方や態度にも変化が見られ<sup>63)</sup>、反保守主義的政治改革、黒人のアフリカ的文化の

59) 毛糸や合成皮革製で通常つばのない、あるいは短いひさしのみ付いた帽子で、長いドレッド・ロックスをその中に入れてかぶる。ロックスが長いと、当然、大きなタム姿になる。

60) たとえば旧約聖書(レビ記21:5)など。この点は彼らの間でも意見が分かれている。櫛を使う者は少なくない。ただし彼らは、未使用者からは「櫛入れ屋」(combsome)と呼ばれることもある。レナード・バレット Sr.『ラスタファリアンズ—レゲエを生んだ思想』(平凡社 1996年) p. 222も参照。

61) 士師サムソンがモデルである。サムソンについては士師記13—16章。

62) 筆者はフィールドワーク中、「むしゃくしゃしていた警察官に無残に切られてしまった!」、「あのポリ公を告訴してやりたい!」などとやり場のない怒りとかなしみを日々訴えられた経験が何度かある。

63) これを野党のJLP側は「洗脳」と批判し、「カストロの傀儡政権か」と悪口を言い、急速に左傾化した政府のイデオロギー論調を牽制した。それに対しPNP側も、JLP

(再) 発見と復興といった面の進行も促された。黒人系の自文化への誇りと尊厳の回復やアフリカのルーツへの肯定的態度も強まり、反体制的でときにラディカル、しかも異端的と糾弾されることの多かったラスタ的思考回路も受容されたり、賛同者を増加させはした。

そうはいうものの、国民がこぞって拍手するといった状況からはほど遠かったのだ。

元来、ラスタの多くは自然と密着した生活を好む。大自然の息吹に触れ、全能の至高神を常に礼拝し、潔癖なまでに聖書の訓戒や規律に従順であろうとする。それもあって、善良で人好きのする性格で、気高い志をもつ人たちが少なくない。しかし、ドレッドであったり、ラスタ・カラーの服飾品を身につけるといった信仰告白をするだけで、スティグマを付与されてしまう。冷酷で侮蔑的な眼差しや態度、あからさまな悪口雑言、舌打ちやつばを吐かれる、そして、無視や差別の数々といった体験をもつ人は数知れない。外見上ラスタであるというだけで警察官の暴言や暴行を受け、屈辱的な尋問、無実の罪による投獄さえあった。

### 3-c. 反社会的集団への厳罰処分

小事件は数知れないが、この時代を大いに騒がし、世間の注目を集めたラスタ関連事件もいくつか発生している。これらには常に実力行使機関としての警察が介入してきたといっても過言ではない。相互の関係をみるとはとりもなおさず、社会システムの暴虐性と被害者の悲嘆と憤怒をクローズアップすることになる。

事件の1つは、クローディアス・ヘンリー牧師 (Rev. Claudius Henry) が起こしたものである。彼自身はラスタとは公言しなかった(といわれる)が<sup>64)</sup>、世間はそうみなしていた。自称「黒いモーセ」、また信奉者の間では

を「CIAの手先」とスパイ呼ばわりしたりした。

64) 筆者が1989年3月にジャマイカで調査した際、ヘンリー一族や側近、親しい信者を中心に作られたコミュニティがあるグリーン・ボトムという村も訪問した。彼は1988年10月に死亡していたが、その時のインタビューでも、数人の親しい信者たちは彼のキリスト教的な墓を見せてくれ、その前で「彼はラスタではなかった」と断言した。しかし一時的にせよ、彼はかなりラスタ的思想信条や実践に傾倒していたと考

「破れの繕い人」(Repairer of the Breach) として知られ、50年代末にその名も象徴的なアフリカ改革教会 (African Reformed Church)<sup>65)</sup> というラストも含まれた組織を西キングストンでつくった。この教会はヘンリー他幹部が起こした1960年4月の「国賊」事件のため、長くは存続せず、メンバーの何人かは地下に潜ったか離散し、70年代末期にはその名を知る人もほとんどいなくなっていた。しかし、当時は世間を騒がせた一大事件として、デマや噂でもちきりであったようだ。

その「国賊」事件とは、教会内でキューバのカストロ議長に宛てた政府転覆計画を記した秘密文書が、銃器や爆発物などとともに発見され、警察により押収されたことである<sup>66)</sup>。ヘンリーが軍隊もつかってジャマイカ島を奪取する計画を練っているらしいとの噂が流れていたのである。ヘンリーらは何か実質的な行動を起こしたわけではない。しかし、ヘンリー他主要な関係者9名は「大逆罪」で逮捕され、彼は重労働を伴った懲役6年の刑を課せられた。当時の彼はすでに、体制側に対し嫌悪感と敵対心をかなり抱いていたようだが、それは彼自身がそれ以前に警察をはじめとする権威体制より受けた処遇に反発していたからだと考えられている。

実はこの事件の少し前から、彼は挙動不審でマークされていた。それは彼の引き起こした別の事件による。「呪術的」言語に満ちた(別名「パスポート」と呼ばれた)証書<sup>67)</sup>を1枚1シリングで何千枚も売りさばき、その証書に書かれた約束、「解放の祝祭」を信じた全島より参集した何百人という人々は、その約束が果たされなかったために、結局行き場を失ってしまったのである<sup>68)</sup>。それはまさしく奴隷の子孫たちがもぎ取られてきた父祖の

えられる。

65) ジャマイカ教会協議会に正規に登録されているキリスト教系の教会ではなかった。自らのアフリカ系人としてのアイデンティティと正統性を主張する人々の自主的な集まりだった。

66) 2,500以上の自動起爆装置、爆薬1,300個、ショットガン1挺、32口径リボルバー1挺、鞘におさめた剣様の鋭い両刃のナタ多数、実弾、ダイナマイト数本などが押収された。

67) バレット 前掲書 p. 156も参照。

68) 参集した大多数、特に地方から出てきた人たちは家財道具を売却し、またある人たちは家財も持参していた。

地「アフリカへ帰れる」という夢を実現せんとする社会からの離脱を目指すものだった。ジャマイカで繰り返しみられた集合行動の一つ「アフリカ帰還」<sup>69)</sup>熱の再燃ともいえる。

この時、それまでの多くの事例と同様挫折し、それだけでなく、人々の非情な嘲笑の的となった。約束されていたことは、日時が延期されるなどの不手際をみせながら、何一つ起こらなかつたからである<sup>70)</sup>。まさしく「予言の失敗」であった。しかし、カリスマ的リーダーの発する疑似キリスト教色の濃厚なメッセージに魅了された大衆は、その実現可能性の有無を確認するよりも、困難が大きいと感じればそれだけ、天啓の恩寵に対して揺るがぬ信仰を強めるべきだと受け止めたにちがいない。なぜならばリーダーはモーセと、自らはイスラエルの民と同一視されていたからだ。聖書的なアナロジーを読み取ることは、奴隷制時代よりキリスト教のメッセージを受容してきた大多数のジャマイカ人にとって困難ではなかつた。

彼は数日後、逮捕される。裁判所の判決では、100ポンドの罰金と1年間の謹慎という軽い刑ですみ、その後釈放された。彼は信者や賛同者以外の人々に何かを実質的に強制したわけではない。「アフリカ帰還」のための具体的準備などで他人に多大な損失をもたらしたものの、危害を加えたわけではなかつた。しかし、彼とその教会のメンバーが受けた汚名は、決して挽回されることはなかつた。

### おわりに

以上垣間みたような「暴虐」の実態例は、ここに示しきれないほどある。重要なことは、いかに人が自ら真、善、美、愛と信じ行動しようとしても、それらが世の大勢／体制と矛盾したり、反感をもたれば、それだけで暴

69) 拙稿「アフリカ帰還への待望—ジャマイカのラスタファリアンの夢と現実についてのスケッチ」『大阪学院大学人文自然論叢』18号1988年も参照されたい。

70) 内容と含意がこれに酷似した予言とその成就の失敗例で時期的に最も近いのは、前述のベドワードという土着バプティスト教会の(黒人)リーダーによるものである。彼は予言された日時を何度か延期したりしたが、最後は狂人扱いされ、キングストン市内の有名な精神病院へ入れられた。

力と虐待を受ける可能性があったし、現在もあるということである。力無き無数の下層階級の人々にとって、警察へ抗議することさえ容易なことではない。「システム」を代表する制服の威力は甚大で、それに黙従することを暗黙のうちに強要されているのが一般市民である。理不尽な官憲の暴虐を個人的に、また知り合いが受けてきたその無念や悔恨は人々の間に沈澱しているが、しばしば攪拌されるのが実情なのである。

たえまなく襲う外部の圧倒的な力ゆえに、個々人の存在は押しつぶされてしまうかにみえる。しかし、彼らはルサンチマンでは終わりたくない。過酷な生活を少しでも主体性をもって、自らの存在を主張しつつ生き抜くために、直接的暴力を最後の手段として、多様な知恵を編み出し、それを実践してきた。その鬱積した欲求不満は、たしかに実際の物理的爆発に至る場合もままあった。彼らこそ、「システム」により焼き討ちと掠奪の対象とされてきた被害者だからである。しかるに、彼らは貶められてばかりの状態にはうんざりしている。我慢の限界はとっくに越え、抑圧に向かって立ち上がり、火の手でむしり取ろうとするのである。

悲惨をなめたことのない「奴ら」には、「目には目を、歯には歯を」の掟でも実践してでしか、激情はわかってもらえまい。それゆえ、その鬱憤を振りはらうように、疾風怒涛が押し寄せるごとく、号令が繰り返される。

「今夜、焼き払え、奪い取れ」という叫びは、焼き討ちや掠奪行為を正当化したくなるほどの怒りと嘆きの底無しの大きさをまざまざと見せつけるものである。

そこに現前するのは、「汚れ」(pollution)と「幻」(illusion)である。「汚れ」とは「汚辱」、「汚染」、「墮落」であり、「幻」は「錯覚」、「迷妄」とも解釈できる。醜悪さ、邪悪さは焼き尽くされ、欺きや惑わしに満ちた虚飾の現状は、強奪によって、その正体を暴かれなければならない、というメッセージと読み取れる。同様の報復をまき散らさんとする意気込みは、「奴ら」に内在する「汚れ」や「幻影」をえぐり出せるはずなのである。

かくも乱暴な暴力行為は、しかし有効な捌け口の1つを見出した。それがレゲエである。レゲエによって彼らの爆発は昇華されてきた部分も少なくないといわれてきた。レゲエが「抵抗や抗議の歌」、「音楽の武器」と

呼ばれるゆえんである。これらの歌に共観／共感しえてこそ、彼らの生きざまも、考えも感情も、そしてジャマイカ社会のありようも、理解できると言えるのではないだろうか。

This morning I woke up in a curfew, oh God  
I was a prisoner too, yeah  
Could not recognize the faces standing over me  
They were all dressed in uniforms of brutality

How many rivers do we have to cross  
Before we can talk to the boss  
All that we got seems lost  
We must have really paid the cost

(That's why we gonna be)  
Burnin' and a-lootin' tonight  
(say we gonna burn and loot)  
Burnin' and a-lootin' tonight  
(One more thing)  
Burnin' all pollution tonight  
(Oh yeah yeah)  
Burnin' all illusions tonight

Oh stop them

Give me the food and let me grow  
Let the roots man take a blow  
All them drugs gonna make you slow, now  
It's not the music of the ghetto

Weeping and a-wailing tonight  
(We've been suffering all these long, long years)  
Weeping and a-wailing tonight

[repeat third verse]

We gonna be burnin' and a-lootin' tonight  
Burnin' and a-lootin' tonight  
(save your babies lives)  
Burning all pollution tonight  
Burning all illusions tonight